聖　書：コリント人への手紙第二 5：1〜5
説教題：天からの住まいを着たい
日　時：2024 年 11 月 17 日（朝拝）

コリント教会に入り込んでいた偽使徒たちはパウロの宣教活動が苦しみで特徴付けられることを見て、彼を見下していました。神の祝福を宣べ伝える者が、あのような苦しみの中に置かれ続けるはずはない。だから彼は使徒ではないと。そうして彼らは自分たちの外見的な華やかさ、立派さ、雄弁な話しぶりなどを誇っていました。そんな偽教師たちの影響を受けつつあったコリント教会にパウロは主に従って歩む者には「キリストの苦難」という道があることを語っています。イエス様は十字架への道を通って死に、それから復活して栄光へと入られました。イエス様は「だれでもわたしに従って来たければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」と言われました。ですからそのイエス様に従う者には当然イエス様の十字架を映し出すような姿が見られるべきである。そしてイエス様が十字架を通してご自身の栄光を現されたように、イエス様に従う者もイエス様の十字架を映し出すような弱い状態を通してこそ、神の福音をより良く、力強く語り伝えることができるということをパウロは述べています。

前回最後の 4 章 16 節以降でパウロは「ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています」と言いました。偽教師たちが誇る外なる人はやがて必ず衰えます。パウロはそうではなく、キリストにある内なる人に目を留め、これが日々新たにされていることを喜んでいます。また 17 節では今の一時の軽い苦難が、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光をもたらすと言いました。キリストに従って苦難の道を行くことは後で測り知れない栄光を私にもたらすと。ですから彼は「私たちは見えるものにではなく、見えないものに目を留めます」と言いました。「見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです」と。

今日の 5 章 1 節は原文で「というのは〜だからです」という言葉が文頭にあります。つまりパウロが見えないものに目を留めて歩むと言った時、特に何を考えていたかがここに明らかにされています。その 5 章 1 節は「たとえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには天に、神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まい

があることを、私たちは知っています」と始まります。これはパウロとコリント教会が共通に知っていることです。パウロはコリントにいた時、彼らにこのことを伝え、彼らもそのメッセージを聞いて受け入れ、今や同じ信仰に立っています。そのことをパウロは思い起こさせます。まず「私たちの地上の住まいである幕屋」とありますが、これは何のことでしょうか。これは私たちが地上で住む家、住居のことではありません。文脈を考慮すると分かりますように、これは私たちが地上で生活する間の肉体のこと、からだのことです。4 章 16 節の外なる人に該当します。それは衰えると言われていましたが、ここでは「壊れる」と言われています。つまり死ぬ時のことです。

まず注目すべきは地上の私たちの体が「幕屋」と言われていることです。これは何を意味しているでしょうか。それはこれは弱く、脆いということです。強い風、嵐が吹き付けたらすぐに倒れてしまいます。頑丈な造りにはなっていません。またこの幕屋には「一時的」というイメージもあります。荒野を旅する間、神の臨在の象徴となったのは幕屋でした。それは移動式のもので畳んで持ち運べるものでした。私たちの地上の肉体はそのようなものだとこの箇所は言っています。それは弱く、脆いものです。そんなに強くはありません。また一時的なもので移動することを前提にしています。これは私たちが地上では旅人であると言われている聖書のイメージとも結びつきます。私たちはいつまでもこの世に住みつく者ではありません。

これと対照的なものとして同じ 1 節で言われているのは、天にある永遠の住まいです。これも天国にある家のことではありません。先に言われたことと対の関係にある表現ですから、これは天で私たちに与えられるからだを指します。それは「神が下さる建物」と言われています。先の「幕屋」と比較するなら、天で与えられるからだがはるかに勝ることが分かって来ます。「幕屋」は一時的なもので華奢な造りになっていますが、「建物」は頑丈な造りになっていて恒久的です。ですから「永遠の住まい」と言われています。そしてこれは「神が下さる」もので「人の手によらない」とも言われています。地上のからだも神が下さったものですが、そこには人も介在しています。しかし天で与えられるからだはただただ神によるものであり、人の手には一切よらないものです。そういうからだをいただくのです。このことを私たちは知っていますとパウロは言います。そして大事な問いは、私たちは果たしてこのことを良く知っている者たちとして、そういう者らしい生活をしているのかということです。

ともすると私たちは自分の外なる人のために一生懸命になりがちです。外見や見た目のためにどれだけ多くの時間とお金がささげられているでしょうか。その外なる人は日々衰え行くものです。そして今日の１節にある通り、壊れるものです。終わりとなる日が来ます。その時、それまで内なる人が日々新しくされて来た人は、それまでの幕屋に代わって神が下さる「建物」と表現される、いつまでも続く永遠のからだをいただきます。私たちはどちらをより重く、大切に考えるべきでしょうか。言うまでもなくそれは後者ですね。一時的で過ぎ去るものより、永遠に続くことの方がはるかに価値があります。

これはもちろん今の地上のからだを軽蔑するということではありません。この今のからだも神が下さったものです。私たちはこれを感謝して健康を保つように正しく管理し、またこのからだを通して様々な神の祝福を楽しみ味わって良いのです。しかしこれを大事にしようとするあまり、キリストに従うための苦しみとか福音のための労苦を回避したり、疎んじたりしてはならないのです。何のためにこのからだは与えられているかということを良く考えて見なければならないのです。このからだは弱いものです。それはやがて過ぎ去るものです。間もなく終わりとなります。しかしそれが壊れた後で、神はご自身に従って歩んだ者たちに、人の手によらない永遠の住まいを与えてくださいます。今度は建物と表現されるほどにはるかに素晴らしいものです。このことを見つめることによって地上の私たちの歩みは正しく形作られて行くべきなのです。

2 節に「私たちはこの幕屋にあってうめく」とあります。私たちの地上の生活にはうめきがあります。苦しみがあります。その根源には人間の罪の問題があります。神が造られた最初の世界に苦しみはありませんでした。その世界に苦しみが入って来たのは人間の罪のためであると聖書は語ります。私たちは信仰を持っても同じ世界に住んでいるため、引き続き様々な苦しみがあります。それに加えて福音のための労苦、主に従うがゆえの苦難もあります。しかしこのうめきは絶望的なうめきではなく、希望とセットになっていると言われています。天から与えられる住まいを着たいという切望とのセットです。良い将来が来ることを知っているからうめいて待つのです。同じことはローマ人への手紙 8 章 23 節でこう言われています。「それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだが贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。」　私たちは今、

この幕屋にあって様々な弱さを覚えていますが、やがてこれが克服されて天からの完全で素晴らしいからだをいただくことを待ち望むがゆえにうめくのです。

3 節に「その幕屋を脱いだとしても、私たちは裸の状態でいることはありません」とあります。これは当時のギリシャ思想の考えを排除するための言葉と考えられます。ギリシャ哲学では、ご存知の通り、魂が善で、肉体は悪と考えられていました。悪いのは私たちのからだである。これが悪の元凶である。一方、私たちの霊は善を志向する。ですから死によって魂と肉体が分離し、魂がいわば肉体という牢獄から解放されることが救いであると考えられていました。魂だけの状態が理想的というのです。しかしパウロはそうでないと言っています。この肉体がない状態をここでは「裸」と言っていると考えられます。パウロは続く 4 節で、この幕屋のうちにある間、うめいているのは、この幕屋を脱ぎたいからではないと言います。ギリシャ哲学が言うように魂だけの状態、肉体から解き放たれた裸の状態になりたいからではない。そうではなく、天からの住まいを上に着たいからだと言います。ここにキリスト教のメッセージは単なる霊魂不滅説ではないことが明らかにされています。体は捨てられて霊魂はいつまでも生きるという教えは多くの宗教に見られます。それはキリスト教独特の教えではありません。キリスト教の特徴はむしろ体の復活を語る点にあります。人間は体と霊魂の両方を持つものとして造られたように、その救いは霊魂ばかりか体にも及ぶものとされます。霊が聖められるばかりか、聖められた新しいからだをいただくことこそが聖書に特徴的なメッセージなのです。

その天からの住まいについて 4 節に「死ぬはずのものが、いのちによって呑み込まれるために」とあります。思い起こされるのは先の第一コリント書 15 章 54～55 節の次の言葉です。「そして、この朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、このように記されたみことばが実現します。「死は勝利に呑み込まれた。」「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」　死は今圧倒的な力を持って私たちとこの世界に臨んでいます。誰一人この死の力から逃れられる人はいません。すべての人がこの力の下に屈服させられています。しかしそれがいのちによって呑み込まれると言います。すなわちキリストが勝ち取った復活のいのちの力が死の力に対して圧倒的に勝利し、これを呑み込み、跡形もないものにしてしまうのです。私たちがやがていただく体はそのように死の法則が全く取り去られ、キリストが勝ち取った圧倒的ないのちによって特徴づけられる

もの、そのいのちで満ち満ちたものとなるのです。これこそが私たちの望みです。これこそを欲して私たちはうめくのです。同じ第一コリント 15 章 42〜44 節では、現在の私たちのからだと将来キリストにあって与えられる新しいからだが次のような言葉で対比されて表現されています。今のからだは朽ちるものですが将来与えられるからだは朽ちないものです。今のからだは卑しいものですが将来のからだは栄光あるものです。今のからだは弱いものですが将来与えられるからだは力あるものです。そして今のからだは血肉のからだですが将来のからだは御霊のからだ、すなわち聖霊の祝福が十二分に満ち溢れるからだです。現在の私たちのからだからは想像もできないような素晴らしいからだが用意されています。このやがて与えられるものを見つめることによって私たちの地上の生活は導かれて行くべきであるということです。これが見えないものに目を留める生活です。見えるものではなく、見えないものに目を留めて、私たちはこの地上の生活を歩むべきなのです。

最後の 5 節に「そうなるのにふさわしく私たちを整えてくださったのは、神です」とあります。これらすべてを準備くださったのは神です。ローマ人への手紙 8 章 30 節に「神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました」とあります。この最後に言われている栄光の状態が今日見ている内容に当たります。神はこの最後の栄光に私たちが至るようにとすべてのことをご計画くださいました。キリストにあってこの祝福に私たちが生きるようにすべてをご準備くださいました。ですからこのことは必ず実現するのです。そしてその保証として神は御霊をくださったとあります。すでにこの手紙の 1 章 22 節で「神はまた、私たちに証印を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました」と言われていました。その時も簡単に触れましたが、この「保証」という言葉は欄外の注にありますように「手付け金」という意味の言葉です。手付金とは家や車など大きな買い物をする際に支払う頭金、前払い金のことです。それは支払う代金全体の一部を構成しています。つまり聖霊は天国の祝福を先取りして私たちに味わわせてくださるお方であるということです。天国のことは天国に行ってからでないと分からないはずですが、神は聖霊によって私たちに天国の前味を味わわせてくださるのです。この世にありつつ、私たちは聖霊によって御国の味を先取りして味わう者たちとされています。聖霊はそのようにしながら、私たちが最終的に御国に入る日まで導いてくださるお方です。エペソ人への手紙 1 章 14 節 :「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。」　この聖霊に支えられて天からの住まいを着る

祝福に私たちが確実に至るようにと、神はすべてを整えて導いてくださっているのです。

私たちはこの福音を伝えられて、パウロと同じ知識を今や共有している者として、パウロと同じ目をもって日々を過ごしているでしょうか。それとも見えないものより見えるもの、外なる人に専ら関心を注いで歩んでいるのでしょうか。そしてこの外なる人がだんだん衰える様子を見て憂鬱になり、今日の「若さ信仰」に同調して、若い人を羨ましく思い、若い頃に戻りたいとばかり考えて生活しているのでしょうか。それは聖書が示す方向とは逆です。聖書は今あるものに比べてはるかに良いものはこれから来る！と述べています。死ぬはずのものがいのちによって呑み込まれる日が来ます。キリストが勝ち取ってくださった祝福が完全な形で現れる日が来ます。ですから私たちは外なる人に注目して後ろ向きの生活をすべきではありません。むしろ前を向くべきです。最高の時はこれから来るのです！私たちは過去に素晴らしい経験を持っているかもしれません。それは神が下さった祝福なら感謝して受け止めて良いものです。しかしそれはこれから神がキリストにあって与えてくださる最後の完全な祝福を指し示すほんのかすかな輝きに過ぎないものです。神は良い方として以前私たちが経験した祝福を与えてくださったかもしれません。しかしそれが指し示す本格的な祝福、これまでのどんなに素晴らしい経験にもはるかにまさるいのちの祝福、栄光の祝福に私たちはこれからあずかろうとしています。

この知識を持っている者たちとして、私たちは今うめきつつも、この栄光の日を待ち望む歩みをする者でありたいと思います。そしてそれゆえ、今のからだを主の御心なら、主に従う苦難の道をも厭わず進むために用いたいと思います。私たちは今のからだを無下に扱わず、大事にしますが、主の御心に従ってこの身をささげるその歩みの先に栄光があります。今の私たちの幕屋なるからだはやがて神が下さる建物、永遠の住まいに取って代わられることになります。その日を喜び見つめて主に従う歩みへと励まされたいと思います。そして地上の歩みを全うして、ついに神が下さる「天からの住まいを着る者」とされる栄光に至る歩みを導かれてまいりたいと思います。